The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第44号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 149-153
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26537
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

現在、学部の哲学・思想文化学専修には 33 名が在籍しています。大学院の哲学哲学史博士前期課程には 8 名、同後期課程には 12 名が、大学院の現代思想文化学博士前期課程には 7 名、同後期課程には 3 名が在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、野々村梓助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「ドゥルーズの『差異と反復』を読む II, III」「近世哲学と無限」「スピノザ『エチカ』を読む XIII, XIV」「ドゥルーズの時間論」（上野教授）、「Discussing Horwitch's "Meaning"（1）, （2）」「問答の観点からの哲学的意味論・真理論」（入江教授）、「カント『実践理性批判』を読む V, VI」「ドイツ哲学基本文献講読 I, II」「カントの法論をめぐる諸問題」「J. ハーバーマスの思想 VII」（舟場准教授）、「ハイデガーの思想（3）, （4）」「ショーペンハウアーとニーチェ（3）, （4）」「現代哲学史概説」（須藤教授）、「環境思想の諸問題」「オルターグローバリゼーションの思想」（望月教授）、「ポスト東日本大震災の科学技術と社会（2）」「科学技術社会論：医療と当事者参画」「技術論と技術の哲学」（中村准教授）、「Writing Humanities Paper in English I,II」（望月教授・中村准教授）、「デカルト『方法序説』講読 I, II」（野々村助教）という題目で行われています。その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行われ、活発な研究・討論が行われています。非常勤講師としては、Michel Dalissier 氏（同志社大学）に「Philosophie comparée」、周藤多紀氏（山口大学）に「十三世紀におけるアリストテレス倫理学の受容」、重田謙氏（大阪大学）に「論理学初級（1）, （2）」という題目で講義していただいています。

HP（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）とウェブ局「ヴィデオ・メタフュシカ」（You Tube）によって研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、handai metaphysica を開催しています。2013 年 7 月 5 日には特別講演会として、Halla Kim 教授（University of Nebraska）に「Nothingness' in Korean Buddhism 韓国仏教における「無」」という題目で講演していただきました。また、研究例会としては、同年 3 月 15 日に『メタフュシカ』第 43 号の合評会を行いました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。2012 年 11 月 17 日に、「世界哲学の日記念セミナー」を開催し、「『ニーチェの歴史思想――物語・発生史・系譜学』を読む」という題目で須藤教授が講演を行いました。第 8 回哲学ワークショップ（テーマ：「規範はどのようにして基礎付けられるのか――ハーバーマス対ロールズ――」・「直説法と命令法（スピノザとカントの倫理学）」）が 2013 年 1 月 26 日に、第 9 回哲学ワークショップ（テーマ：「二次元意味論――その思想と枠組み」・「パブリック・エンゲージメントと公共性」・「現代社会における倫理学への懐疑の克服をめぐって――ヨナスとハーバーマス」・「真理のプリミティビストとしてのスピノザとホーウィッチ――真理論は存在論から独立しうるか――」）が同年 6 月 29 日にそれぞれ開催されました。

上野教授主宰の「科研基盤研究（B）：近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」（2010 年～ 2012 年）の特別講演会が 2012 年 11 月 4 日（大阪大学）と 2013 年 1 月 28 日（大阪大学）に、第 10 回研究会「カントにおけるスピノザ問題」（大阪大学）が同年 11 月 24 日に、総括シンポジウム「近

現代哲学の虚軸としてのスピノザ」（大阪大学）が同年 11 月 25 日にそれぞれ行われました。論文「真理・意味・主体――デイヴィドソンの根元的解釈とラカン」が、『ジャック・ラカン研究』第 9/10 号（2012 年 12 月発行）に掲載されました。論考「ヴェイユとスピノザ――酷薄の哲学のための覚書」が、『唯物論研究　第 121 号』（2012 年 11 月 30 日発行）に掲載されました。共著『ライプニッツ読本』（法政大学出版局）が 2012 年 10 月に、同じく『哲学の挑戦』（春風社）が 2012 年 11 月に刊行されました。2013 年 4 月 27 日に開かれた第 24 回スピノザ協会総会（明治大学）において、「スピノザの無限」という題目で発表しました。

入江教授が日本フィヒテ協会大会（2012 年 11 月 12 日・神戸大学）にて、シンポジウム（テーマ：「ベルリン期における知識学への準備草稿」）に提題者として参加し、「『意識の事実』と知識学の関係――あるいは、アポステリオリな知とアプリオリな知の関係」という題目で発表を行いました。同年 12 月にはハイデルベルク大学にて「A Proof of Collingwood's Thesis」という題目で、また同大学日本学研究所（Institut für Japanologie Universität Heidelberg）にて「Die große Veränderung der Geisteswissenschaften und Sozialwissenschaften in Japan nach 1990」という題目で講演を行いました。2013 年 3 月 2 日に同志社大学で行われた第 2 回京都フィヒテ研究会にパネリストとして参加し、「徹底的に純粋な観念論の限界――フィヒテが知の外部に絶対者を想定する理由――」という題目で発表しました。論文「意味の全体論とフィヒテの知識学」が、『フィヒテ研究』第 20 号（2012 年 1 月 20 日発行）に掲載されました。

舟場准教授が、哲学的人権概念研究会（2013 年 3 月 8 日・早稲田大学）にて「法を道徳によって根拠づけることの問題性について――アーペルとハーバーマスの議論を手がかりに――」という題目で、また超越論的語用論研究会（同年 3 月 22 日・琉球大学）にて「世界内政治。責任の限界と脱国家化　政治と人権の関係を定めるいくつかの可能性について」という題目で、2013 年 8 月 21 日には、早稲田大学ヨーロッパセンター（ドイツ・ボン市）で開催された第 7 回日独倫理コロキウム（Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium）にて、「Sind Menschenrechte moralisch oder juridisch zu verstehen?」という題目で発表を行いました。

望月教授が関西哲学会第 65 回大会（2012 年 10 月 27 日～ 28 日、名古屋大学）で、シンポジウム「科学技術文明と哲学知」に提題者として参加し、「3.11 後の世界を生きる――悲観主義と楽観主義のあいだで――」という題目で発表しました。2012 年 11 月 24 日～ 26 日および 30 日に、カンボジアのパンナサストラ大学で開催された国際シンポジウム（テーマ："Perspective and Reflection on the Philosophical Practices in Asia"）において、「Philosophical Practice for Peace Building: Creating a New Philosophy Graduate Program in Cambodia」という題目で発表を行いました。2013 年 8 月～ 9 月に、タイのチュラロンコン大学にて、非常勤講師として講義を担当しました。

中村准教授が科学技術社会論学会第 11 回年次研究大会（2012 年 11 月 16 日～ 18 日・湘南国際村センター）にて「『次世代の視点』から見る『日本の STS』の将来」という題目で発表を行いました。共著『ポスト 3・11 の科学と政治』が 2013 年 1 月に発行されました。（はじめに、おわりに、コラム「利益相反」の項を担当）。また、2012 年 11 月より、『Rimse』（一般財団法人理数教育研究所発行・季刊）にて「社会のなかの科学技術」を連載しています。

小田裕二朗院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）の論文「スピノザ『エチカ』における人間本性の型」、および山本哲哉院生（現代思想文化学博士前期課程在籍）の論文「文化を巡って」が『哲学の探求――2012 年度哲学若手研究者フォーラム論文集』（第 40 号・2013 年 5 月 8 日発行）に掲載されました。阿部倫子院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）が日本ライプニッツ協会第 4 回

大会（2012 年 11 月 4 日・東京女子大学）にて「可能的な物体と現実世界の物体の違いについて」という題目で発表しました。藤野幸彦院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）がスピノザ協会第 61 回研究会「テーマ：個物をめぐって」（2013 年 3 月・明治大学）にて、「スピノザ『エチカ』における様態概念の解釈――ベネットの “Field metaphysic” をめぐって」という題目で発表しました。生島弘子氏（現代思想文化学単位修得退学）が日本哲学会第 72 回大会（2013 年 5 月 11 日～ 12 日・お茶の水女子大学）にて「知恵と生、ツァラトゥストラの二人の女――後期ニーチェ思想で構想される哲学者像」という題目で発表しました。2013 年度哲学若手研究者フォーラム（2013 年 7 月 13 日～ 14 日・国立オリンピック記念青少年総合センター）にて、仲宗根勝仁院生（哲学哲学史博士前期課程在籍）が「二次元意味論にもとづくチャーマーズのフレーゲ的意味論について」という題目で、下山惣太郎院生（哲学哲学史博士前期課程在籍）が「実体の区別とルーマンにおけるオートポイエーシス」という題目で、原田淳平院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）が「真理はいかにして多元的でありうるのか――真理の多元主義自体の多元性を検討する――」という題目で研究発表を行いました。第 20 回関西大学生命倫理研究会（2013 年 7 月 20 日・関西大学）にて、戸谷洋志院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が、「「乳飲み子」を「看る目」――ハンス・ヨナスの責任倫理学における認識論について」という題目で発表しました。第 23 回世界哲学会アテネ大会 XXIII World Congress of Philosophy（2013 年 8 月 4 日～ 10 日・アテネ大学）にて、原田淳平院生が「What Do We Use “Truth” For? ――Criticizing Horwich’s Minimalism」という題目で、嘉目道人院生（哲学哲学史博士後期課程在籍）が「Fichtean Intellectual Intuition Revisited: On the agent’s knowledge in Transcendental Pragmatics」という題目で発表を行いました。関西哲学会第 66 回大会（2013 年 10 月 19 日～ 20 日・大阪大学）にて、井西弘樹院生（現代思想文化学博士後期課程在籍）が「中期ニーチェにおける正義論」、戸谷洋志院生が「ハンス・ヨナスの責任倫理における「乳飲み子」の機能について」、藤野幸彦院生が「スピノザ『エチカ』における様態概念の定位――偶有性概念への反駁として」という題目で研究発表を行いました。関西倫理学会 2013 年度大会（11 月 2 日～ 3 日・立命館大学）にて、小田裕二朗院生が「スピノザ『エチカ』における欲望 cupiditas の変容」という題目で発表しました。

平野一比古氏が、2012 年 9 月に博士論文「ベルクソンにおける自由と直観について：「働く」時間と否定の力を通して」によって博士（文学）の学位を取得しました。

（野々村）

○　臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生が 29 名、大学院生が 24 名（前期課程 13 名、後期課程 11 名）である。中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、稲原美苗助教の各教員スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

本年度は非常勤講師として、家高洋氏に「ガーダマーを読む」と「メルロ＝ポンティの思想」を担当していただき、久保田テツ特任准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に「思考の活動とメディア」を、菊地建至氏に「臨床哲学フィールドワーク」（新設）を、そして、大北全俊氏に「臨床哲学概論 13」を、それぞれ本間直樹准教授と共同で、担当していただいた。

2013 年 4 月に研究室の雑誌『臨床哲学』14-2 号を昨年度と同様に web 上で刊行した。また昨年度より年 2 回の発行とし、2013 年 10 月に同 15-1 号を刊行した。14-2 号は論文 3 編、翻訳 1

編（解題つき）、研究ノート 1 編、ワーキングペーパー 1 編を、15-1 号は論文 4 編、翻訳 1 編、講演録 2 編を掲載した。また『臨床哲学のメチエ』を学部生と院生の共同編集のもと 20 号を発刊した。20 号では「教育／成長」と「さまざまな対話」という二つのテーマを設定した。

昨年度に引き続き本年度も臨床哲学研究会を定期的に開催した。昨年度の開催について、まず 2013 年 1 月 20 日に「第 31 回臨床哲学研究会」を開催した。博士課程前期在籍の川崎唯史が「安全から安心へ――創造的な対話に向かって」、博士課程後期在籍の中西チヨキが「苦しみと感謝のなかで――病いの子どもを介護する母の言葉から」を発表した。本年度に入り、2013 年 6 月 16 日に「第 32 回臨床哲学研究会」を開催した。博士課程前期在籍の金和永が「「アイデンティティ」と、悼みの分配」、辻村修一（早稲田摂陵中学校・高等学校教員）が「哲学的な思考を養成する「総合的な学習」の実践に向けて――文科省が規定するキャリア概念に対する懐疑を前提に」を発表した。

本年度は、2013 年 12 月 7 日に「第 33 回臨床哲学研究会」、2014 年 3 月 23 日に「第 34 回臨床哲学研究会」の開催を予定している。

中岡成文教授が、財団法人メンタルケア協会編『精神対話論』（慶應義塾大学出版会、2013 年 3 月 30 日）に「自己変容を援助する思想」と題する章を執筆した

浜渦辰二教授は、自身が代表をしている「ケアの臨床哲学」研究会の主催するシンポジウム「超高齢社会のなかで〈食べる〉を考える」（2013 年 3 月 24 日）、「超高齢社会のなかで在宅での看取りを考える」（同 7 月 15 日）、シンポジウム「超高齢社会のなかで地域ケア力を考える」（11 月 9 日）を、大阪大学中之島センターおよび大阪市立青少年センターで行った。また、シンポジウム「地域におけるがん患者支援～在宅ホスピスの可能性～」（患者のウェル・リビングを考える会主催、同 4 月 21 日）および「エンディングノートを書いてみよう――自分のいのちを考える――」（播磨・ともに歩むケアと医療を考える会主催、同 5 月 11 日）でコメンテータとして参加したほか、講演「医療と福祉をつなぐケア学」（播磨・ともに歩むケアと医療を考える会、2013 年 2 月 23 日）、同「「二･五人称の医療」とは」（川崎医学会講演会、同 8 月 5 日）を行った。そして、フッサール研究会主催・臨床哲学研究会共催のシンポジウム「フッサール倫理学の可能性」（同 7 月 27 日）で司会をつとめ、八重樫徹氏（PD として受け入れ中）の課程博士請求論文（東京大学に提出）の審査会では副査を、中村剛氏（同 3 月単位取得済修了）の課程博士請求論文の公開審査会（同 8 月 19 日）では主査をつとめた。また、ドイツ・ケルン大学のフッサール文庫主催、ドイツ現象学会共催の国際会議 “Soziale Erfahrung“（同 9 月 25-28 日）において “Caring und Phänomenologie - Aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intersubjektivität” と題する発表をおこなった。同年 10 ～ 12 月の間、ISAP プログラム交流協定に基づく交換講師としてドイツ・ハイデルベルク大学に滞在し、主に、Hauptseminar “Von Geburt, Alter, Krankheit und Tod in der modernen Gesellschaft Japans” を担当した。また、2012 年度に共監訳にてフッサール『間主観性の現象学～その方法』を刊行したのに続いて、『間主観性の現象学Ⅱ～その展開』を刊行した（同 9 月上旬）。

本間直樹准教授が総合コーディネータをつとめている「中之島哲学コレージュ」も、毎月セミナーと哲学カフェを定期的に「アートエリア B1」にて開催している。また、電子情報通信学会・ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（2013 年 3 月 4 日）にて、招待講演「話す、自分を見せる、変わる：対話から場を考える」を、日本哲学会第七二回大会哲学教育ワークショップ（2013 年 5 月 10 日、お茶の水大学）にて、報告「考える人は美しい」を、韓国、江原大学で開催され

た第 5 回人文治療学国際会議（2013 年 5 月 30 日）にて講演「大阪大学における臨床哲学のプログラム」をおこなった。

稲原美苗助教が、2013 年 7 月 13 日に、大阪大学最先端ときめき推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」第 40 回ときめき☆セミナー（身体性の現象学と当事者研究）で「障害のある身体、健常な形：ファノンとボーヴォワールの対話についてのフェミニズム的探求」を講演した。そして、同年 8 月 4 日から 10 日にギリシャ・アテネ大学で開催された第 23 回世界哲学会議でのラウンドテーブル・セッション「Feminist Phenomenology and Vulnerability（フェミニスト現象学と脆弱性）」を企画し、「The Disabled Body, the Able-Bodied Form: A Feminist Exploration of Dialogue between Fanon and Beauvoir」を発表した。また、2013 年 6 月に自身が中心メンバーの一人として当事者性を考える研究者の会を立ち上げ、第 1 回研究会「病いの語りと当事者性」（大阪大学・吹田キャンパス、共催：ナラティブと質的研究会）を 10 月 27 日に開催し、「障害当事者から観た『ピノキオ』：スペクテイターシップと語り」の発表を行った。石原孝二・稲原美苗編『共生のための障害の哲学――身体・語り・共同性をめぐって』（UTCP-Uehiro Booklet 2）と、共訳者として関わった『スティル・ライヴズ――脊髄損傷と共に生きる人々の物語』（ジョナサン・コール：著 , 河野哲也、松葉祥一監訳、法政大学出版）が 10 月に出版された。

本年度の開講授業は以下の通り。「倫理学の研究方法 A・B」（中岡、浜渦、本間、稲原）、「臨床哲学ネットワーキング 13 前・後」（中岡、浜渦、本間、稲原）、「臨床哲学研究 A・B」（浜渦、中岡、本間、稲原）、「臨床哲学概論 13」（本間、大北）、「自己変容の哲学 13 前・後」「Ethics in English 2012」「ヘーゲル哲学を読みぬく 13」（以上、中岡）、「ケアの臨床哲学――障がいとそのケア――」、「ケアの臨床哲学――病いと障がいの現象学――」（以上、浜渦）、「思考の活動とメディア（8）・（9）」（本間、久保田）、「外国語文献講読演習（1）・（2）」（本間）、「臨床哲学フィールドワーク（1）・（2）」（本間、菊池）、「ガーダマーを読む」「メルロ＝ポンティの思想」（以上、家高）。

当研究室では、2 回生から研究を行い、発表をするという演習方式の科目を開講している。それは、プレゼンテーション能力を向上させることのみにとどまらず、聴講後それぞれの研究について対話できる力をつけることを目標にしている。臨床哲学の研究活動領域は「生命（医療、看護・介護ケア、福祉、生命の倫理など）」、「身体（エイジング、ジェンダー、セクシュアリティ、障害など）」、「環境（災害、都市環境、自然、経済など）」、「科学（科学と対話、科学教育、最先端技術の倫理など）、「教育（哲学教育、子どもの哲学、対話教育、芸術と対話など）」など多岐にわたる。

（稲原）